

Title	『ジャップの収容所』紹介：第III部
Sub Title	Jap camp : translation and annotation of selected interviews with citizens of Owens Valley : part III
Author	池田, 年穂(Ikeda, Toshiho)
Publisher	共立薬科大学
Publication year	2000
Jtitle	共立薬科大学研究年報 (The annual report of the Kyoritsu College of Pharmacy). No.45 (2000.) ,p.13- 29
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062898-00000045-0013

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『ジャップの収容所』紹介—第Ⅲ部

池田年穂

Jap Camp—Translation and Annotation of Selected Interviews with Citizens of Owens Valley — Part III —

Toshiho IKEDA

During WWII, some 110,000 Japanese-Americans, two-thirds of whom were American citizens, were interned in ten 'Relocation Camps.' First settled and the most famous, Manzanar camp was constructed in Owens Valley, California. So far, quite a few interviews with Japanese-American internees have been held. It seems, however, to be rather difficult to find the documentation of interviews with the 'ordinary' Caucasians who lived in Owens Valley during the period.

California State University Fullerton Oral History Program, officially inaugurated in 1967, keeps the tapes and its documentation of nearly 2,000 interviews. As to Japanese evacuation and relocation, Arthur A. Hansen and his staff began to concentrate on it in 1973. Their efforts inevitably included the interviews with Caucasians living in Lone Pine and Independence, both situated in Owens Valley and only several miles from Manzanar camp.

The text used for translation is *Camp and Community: Manzanar and the Owens Valley*, 1978, CSUF. The title of the book was originally *Jap Camp* and was changed into the title above through the contest and charges from Japanese-American militants. Two short interviews with male Caucasians in their sixties will be introduced in this article. The interviews were held on the same day in 1973. Readers might be recommended another book, Roger Axford, *Too Long Silent: Japanese-Americans Speak Out*, 1986, which contains interviews with Japanese-American internees.

I. オーラルヒストリー・プログラムについて

二十世紀に入って「録音」という技術が誕生したお陰で、インタビューが社会学的研究の重要な武器の一つとなった。

カリフォルニア州オレンジ郡に位置するカリフォルニア州立大学フラートン校(CSUF)のオーラルヒストリー・プログラムは、1966年に講義形態として始まり、翌1967年に公的に発足している。ケースによっては20時間にまで及ぶ2,000人近い個人とのインタビュー、延べにして3,500時間以上のテープが保管されている上、48,445頁の文書として記録されている。インタビューーらのインデックスも、504頁にのぼる Shirley E. Stephenson, *Oral History Collection*, 1985 (以下OHCと略記)としてまとめられている。

その中でもとりわけ筆者の関心を惹くのは、1972年にアーサー・A・ハンセンを長としてから、より精力的に進められることとなった、第二次大戦中の日系米人強制収容についてのインタビュー(『エスニック・スタディーズ』部門の中の「日系米人史」プログラムに含まれる)の数々である。筆者の調べでは、インタビューーは140人(同席者は除く)、インタビューの時期も1966年から1984年にまたがっている。因みに年度毎、性別、日系かそれ以外かの別については下のようになる。

1966年	6名、	1968年	1名、	1971年	6名
1972年	9名、	1973年	51名、	1974年	13名
1975年	3名、	1976年	17名、	1977年	1名
1978年	16名、	1979年	2名、	1981年	3名
1982年	3名、	1983年	4名、	1984年	5名

(不詳1名、1981年3名の内1名は1982年にもインタビューを受けている)

男 86名

女 53名

(不詳 1名)

日系 90名

非日系 50名

ユニークな点は、当然と言えば当然と思えるが、日系米人のみでなく白人(コーカジアン)、それも強制収容に直接には関わっていなかった一般市民へのインタビューが多数含まれていることである。第二次大戦中10あったリロケーション・センターの内、最も名高いのは、最初のセンターでもあったマンザナーであろう(それに次ぐのが、合衆国政府への「不忠誠者」を中心に再組織されたツールレークかと思う)。マンザナー収容所が事前の予告もないまま建設された地元のオーエンス・ヴァレーの住民、殆どはそれ迄日系米人に関心すら抱いていなかった住民の反応をうかがうのに最適なインタビューが、無論インタビュー各々の収容所・被収容者への意図や関わりにはかなりの深淺がありはするが、このCSUFのオーラルヒストリー・プログラムのコレクションの中にいくつも見出し得る。

ことオーラルヒストリーについては、最新のものが最善とは限らない。筆者も数次にわたり日米加三国でオーラルインクワイアリーを試みてきたが、年月と共に経験者が物理的に存在しなくなったり、知的に衰える例は多い。また、後年になって種々雑多な情報や知識が入ったものをあたかも自らの体験のように錯覚したり、自分の経験やその折の感覚を自分の人生のパスpekティブの中にでなく歴史のパスpekティブの中に過度に整理して配列したり「合理化」したりすることもある程度は避けられない。また、高齢者によく見られるが、信憑性を高めようという意識からか、年月日等ディテールに非常なこだわりを見せることもある。但し、インタビューはインタビューの話の矛盾を指摘することに目的がある訳ではないので、裏付けや訂正のないまま録音されていくことになる。更に、インタビュアーが白人であるか日系であるか、はたまた日本から来た研究者であるかにより、インタビューの内容にニュアンスの差が生じる可能性も高い。勿論、インタビュアーの側の視点や態度もインタビューの成否に影響を与える。完全にニュートラルなインタビュアーというものは存在しないが、時として自分の歴史理解やステレオタイプにとらわれて、インタビュイーを誘導したり、質問の内容を自主規制することもある。これは1991年に筆者が翻訳を刊行した Roger Axford, *Too Long Silent: Japanese-Americans Speak Out*, 1986, 邦題『リロケーション - 日系米人強制収容の証言』西北出版、の「訳者あとがき」にも記したことだが、一世の中には、トラウマチックな体験を過小評価しようとする心理メカニズムを見せる者もいれば、社会的なレファレンス・グループをどこに求めるかによっては『キャンプ生活はヴァケーションじゃった』と表現する者もかなりいたが、一般にそうした発言は日本人研究者のインタビュアーには好まれない。

日系米人強制収容について言えば、「公民権運動」という全米的な分水嶺を越える前と後では、ターミノロジーさえ異なってくる。その一つが「ジャップ」という呼び方である。ジェシー・ギャレットとロナルド・ラーソンは1977年、第二次大戦中にオーエンス・ヴァレーの住民だった白人達(一人、夫妻の内の妻の方が中国系)へのインタビューを20抜き出して *Camp and Community: Manzanar and the Owens Valley* として刊行した。ところが、これは元々 *Jap Camp*, 『ジャップの収容所』というタイトルであり、そのタイトルで広告もうたれていたものが、前年1976年に一部の日系市民からの強硬な申し入れにより変更されたものである。その顛末自体極めて興味深く、我が国におけるパラレルな問題と重ね合わせることも出来ようが、詳細の紹介は他の機会に譲ることとする。

合衆国の60年代は、公民権運動、ベトナム反戦運動、反公害運動の三つの運動で記憶されるであろうが、ジャップという言葉を用いるのは(ニップも同様)その時代背景の中では当然忌避されるようになっていた。それでも、例えばアグニュー・メリーランド州知事の1968年の副大統領選挙キャンペーンの途中での日系二世ジーン・オオインに対する「ファット・ジャップ」発言のように、深刻な「失言」事件もおきている(詳しくは、当事者により、*In Search of Hiroshi*, 1988, 翻訳は『引き裂かれたアイデンティティ』柴矢清一郎訳、岩波書店、1989年、の中に書かれている)。本稿で紹介するインタビューの中では、ジャップという表現は、噂を紹介するとか、他者の言を引用するといったシチュエーション以外では見受けられないが。

Ⅱ. 紹 介

本稿では、ほぼ同年輩の二人の白人男性へのインタビュー（ただしそのうち一人へのインタビューには、その妻が同席している）を紹介する。どちらのインタビューも、1973年12月20日に行われ、アーサー・A・ハンセンはどちらにも参加。デヴィッド・J・ベルタニョーリは、ブランソンのインタビューのみに加わっている。収容所が出来た年（1942年）のインタビュー二人の年齢は、およそ32～34才であった。

(7) ジャック・ホプキンスは、OHCによれば1908年生まれ。1973年12月20日に、アーサー・A・ハンセンによりインタビューを受けている。午後8時からのインタビューで、場所はカリフォルニア州ローンパイン、イーストスクールストリート605番地。35分のテープが残されている。ホプキンス夫人がインタビューの間ずっと同席している。Hは、ハンセン。Jが、インタビュー어의ホプキンス。J夫人が、ホプキンス夫人をさす。

H：ホプキンスさん、それではまずあなたの個人的なバックグラウンドから始めさせて頂きましょうか。現在おいくつになられますか？

J：65才です。

H：ローンパインの町では人生のどれくらいをお過ごしになったのですか？

J：41年間くらいです。

H：それではローンパインにいらしたのは何年という事になる訳ですか。

J：1933年です。

H：ここへいらした時は何をなさっていたのですか？

J：金物類とスポーツ用品を扱う店を買ったのです。それから1945年にこの町で製氷工場と食品保存用冷凍庫設備をつくりました。

H：30年代に遡るとローンパインはどんな所でした？

J：今とそう大きくは変わりません。1933年に、町外れに、ここに1,020人が住んでいるという標識がかかっていました。今では2,000人程度の数字が書いてありますから、40年間でほぼ1,000人増えた事になります。

H：1933年のような年には経済状態はどんなものでしたか？

J：1933年にはかなり順調でした。町の経済の基盤がしっかりしていたのは、オーウェンス湖に面して二基のソーダ工場が操業していたという事実からも分かります。両方とも当時はかなりたっぷりとした給与者リストを備えていましたし、鉱山のいくつかも操業していました。実に結構な小都市だったのです。

H：恐慌の影響は何も体験しませんでしたか？

J：それはありました。私達は誰も恐慌にはやられましたからね。私達は1933年の2月に仕事を始めたんですが、3月の3日か4日頃でしたか、どっちだったか良くおぼえていませんが、我がローズヴェルト大統領殿がすべての銀行を閉鎖してしまった、そこで当時オーウェンス・ヴァレーにあったすべての現金の流れもぱったりと止まってしまった訳です。水利エネルギー局は二週間に一ぺん給料運搬車を派遣して来て従業員に現金で払っていました。そんな訳ですから、私らのような金物屋の商売となると、一日に2ドルも稼げれば良い方でした。銀行の閉鎖は30何日か続きました。妻と私はその頃全く若かったし、儲けたものはすべて店に注ぎ込んでいましたが、最初の2ヶ月というものの店の状況はまことに寒々としたものでした。しかしながら、最初の5年間が経ってみると私達はあまりに借金にどっぷり漬かってたもんで止めることも出来なくなっていた。だから今でもこうしているわけです。(笑い) 1973年1月1日に私達は店を息子夫婦に売却したんで、今や彼らがホプキンス金物店のオーナーです。

H：私は戦争中のマンザナー戦時転住収容所の広報官兼副所長をしていたロバート・L・ブラウンと話したんですが、彼は1930年代半ばにオーウェンス・ヴァレー全体の経済に梃子入れをしようという試みがあった事、この方向での一つのステップがインヨー＝モノ協会の設立だったという事を話してくれました。ブラウン氏がこの協会の事務局長で、彼らは見たところ実際に観光客の往来を刺激したし、ロサンゼルスとサンフランシスコの新聞にいくらかの紙面ももらったし、経済に新しい生命を注入するという事に幾分かは成功したようです。あなたはこの協会のメンバーでいらっしやいましたか。そうでなくとも彼らの活動について、何かしら思い出される事はありますか？

J：私の覚えている限りでは、ボブ・ブラウンがこのインヨー＝モノ協会のアイデアを掲げて当地へ来たのは、1936年か1937年の頃で、私は協会の当初からの理事の一人でした。私達はこの委員会というか協会という

か、これをビショップのエルクスクラブで開かれた会合で設立したんですが、あそこにはかなりの人々が集まっていました。全員の名前を覚えてはいませんがね。当時州の高速道路局の技師長をしていたビル・マッカーシーがいた事は確かです。彼が最初の会長をしたように思います。そもその案というのは、このローンパインから45マイル南のリトルレークから始めて、モノ郡の北端のブリッジポートまで広げて行ったら良いんじゃないかという事でした。

H：ブリッジポートは郡庁の所在地ですね？

J：ええ、モノ郡の郡庁所在地です。

各事業所がこの件に2～3ドル出し合って、そうすれば、いわゆる観光業を興して私らの所を少し知ってもらえるんじゃないか、とりわけ南カリフォルニアにですがね。南カリフォルニアは理屈から言えば私らの経済にとって観光客源ですからね。あれは3年、いや4年かな続きました。それから、こういった一人の人間の手には大きすぎる協会の常として…ボブ・ブラウンはうまくやりましたがね、何せ大きすぎて協会自体のためにならないというんで、いくつかの別々の組織に分裂したんです。その頃に私らはスリーフラッグス高速道路協会を始めました。スリーフラッグス高速道路協会というのはメキシコからカナダへ至る395号線の事ですが、これが私らの始めた別の旅行協会だったんです。その後他にいくつかできました。今現に活動しているものは思いつきませんが、他にいくつか協会は発足したんです。それから、当然ながら、時と共に各町が自分の商業会議所を持つ、ローンパイン商業会議所、ビショップ商業会議所ってね。そしてこれらの組織が多かれ少なかれインヨー＝モノ協会の仕事を引き受けるようになりました。

H：インヨー＝モノ協会のあなたご自身のお店に対する影響はどんなものでしたか？ レジの売り上げが上がりましたか？

J：そうねえ、特にはありませんでした。そう言い切ってもいけないかな。この地域の観光業、観光旅行の本当の推進力は、1937年から1939年頃にかけてここからロサンゼルスに至る道路が舗装された事だったでしょう。そうなってから旅行も増えました。勿論協会も観光旅行を後押しするし、当地への交通手段も改善されるので、私らみんながその効果に気づくようになったんです。

H：道路の改善を推進したのは誰ですか？

J：あれは皆、州高速道路協会によって決められていました。当地で実際にあれを推進したような組織が何かあったとは記憶していません。どの州の高速道路輸送システムにもついてまわると同じでしたよ。あの道路にいつかは手を入れなければならないというのは避けられない事でした。

H：それではあなたは、道路舗装が丁度あの時点になったのは全く偶然の一致だったとお考えなのですね？

J：その通り。丁度景気が停滞していて、ロサンゼルス市が急速に膨張し始め、そこの人々が余暇に出かける先を探している時期に当たったのです。そして私らには当時、実に素敵な釣場や、良い猟場、それに勿論美しい風景がありました。釣りや狩は窮迫のおかげである程度衰退していたけど。しかしその頃オーウェンス・ヴァレーへ旅行に来始めた人々が沢山いました。私らには今でもここに人々を惹き寄せる景色がありますがね。

H：あなたは30年代後半に郡政執行官会議に入っておられましたか？

J：いいえ、私が郡政執行官会議に入ったのは1957年1月1日です。郡政執行官会議には16年間おりました。しかしそれより前にローンパイン商業会議所の副会頭を務めていましたよ。

H：それはいつの事でしたか？

J：1936年だったと思います。

H：それでは当時商業会議所とインヨー＝モノ協会が同時にあった訳ですね？

J：そうです。商業会議所はその頃に発足したのです。この町の商業会議所はシュルツ先生によって始められたのですが、この人は医学博士で、今でも町にかなりの土地を持っています。現在ではカリフォルニアのオーシャンサイドで開業しています。当時はここで病院を持っていました。市民組織の活動に熱心な人で、商業会議所を発足させた一人になりました。当地にローンパイン・ランバー・サプライという材木置場を持っていたルディー・ヘンダーソンも設立者の一人です。ダウホテルをつくった人で、材木置場を初めとしていくつかの事業もやっていたウォルター・ダウ氏も商業会議所の元々のメンバーの一人です。

私は1936年と1937年にこのライオンズクラブの議長でした。ローンパインでは1929年の設立以来ライオンズクラブの活動は盛んですよ。

私はいつだって公の事業や体育事業には熱心でした。すべてのハイスクール対抗のフットボール試合でア

ナウンサーをしました。野球のチームも運営しましたし、この町で31年間野球を楽しみました。

H：それでは、1942年の初めに、多くの日系米人をここオーウェンス・ヴァレーに連れて来て転住収容所に収監しようという計画がある事にあなたが気づかれたのはいつ、どのようにしてだったでしょう？ この件について気配を感じられたのはいつの事でしたか？

J：それが起こる一週間前ですか。

H：それについてはどんな風に聞いたのですか？

J：単にそういう事態が起こってしまったんです。つまり、私の知る限り、何ら事前の予告はなかった。議論もなかったのです。地元のコミュニティーは相談を受けませんでした。それで、あつという間に私らは新聞で、そういう事態がまもなく起こる事、連邦政府がマンザナーの土地を使用してマンザナー戦時転住局を設置する件をロサンゼルス水利エネルギー局と取り決めたという事を知ったんです。

ニュースは入り混じった感情を以て受け止められました。ここの人々もインディペンデンスの人々も、政府がこの件について実際にどう考えているのか今一つははっきり分からなかった。これは強制収容所になるのか、それともホリディオオンアイスになるのか、一体何になるのか、っていう訳です。

H：何か流言のようなものは飛んでいませんでしたか？

J：あまり多くはなかったですね、いや、全くなかった… 噂が飛んだかも知れないという記憶さえないなあ。

H：軍がここへ先乗りして、これから10万人の日本人をここへ送り込むんだというような事を触れ回ったという噂が一つあったのですが、覚えていらっしゃるでしょうか？

J：いいや、覚えていないなあ。軍の人々がここにいたのは知っていますが、当時はネヴァダ州ホーソーンに弾薬貯蔵所があるもので、ここを通過して行く護送隊がいましたから。当時彼らはそのホーソーンに、弾薬貯蔵所を始め実に色々な物を建てていた訳です。軍の人間がいたとって、私らにはこれから起こる事の予告にはならなかった。

H：それで、収容所ができると分かると、オーウェンス・ヴァレー委員会とかいう委員会が成立したのは確かです。ラルフ・メリットやボブ・ブラウンを始め地域の沢山の人間が入っていました。ジョゼフ一族の一人、ダグ・ジョゼフも委員会の一人だったと思います。あなたもこの委員会に入っておられましたか？

J：いえ、いえ、入ってないと思います。私は勿論その人達とは大変親しくしておりました。私はラルフ・メリットとは、彼のかかわった多くの事業において親しく一緒に仕事をしましたが、そういう性質の委員会に入っていた記憶はありません。

H：この地域の人々と話した経験から、私は当地の住民が収容所に対して相反した態度で接したという結論を下しました。結局の所収容所のおかげで何らかの仕事が手に入るようになったという事があるのですが、あなたもご指摘になったようにローンパイン地域でもインディペンデンス地域でもある程度の警戒感もあったようです。人々の不必要な警戒心を呼びさます事がないように、当地でこれから起こる事態が間違いのない性質のものであるといった趣旨の新聞キャンペーンや情報提供の試みがなされた事を覚えていらっしゃるでしょうか？

J：いいえ。当時はジョージ・サヴェージが当地の地方紙の編集者だったと思いますが、かなり幅広いニュースを提供していました。新聞は、収容所に対する感情がどうなるだろうかについて、どちらかの側につくという事はしませんでした。勿論大衆はいつだって存在する訳ですし、御存知のように大衆のある所いつでも、問題が何であるかにはかかわりなく常に二つの側ができる、賛成側と反対側です。1970年にビショップに生態学のキャンプが据えられた時を思い出しますが、当時の郡政執行官会議のいく人かと町の人々の一部は頑強に反対したものでした。キャンプは入って来て、何ら問題は起きなかった。マンザナーも同じようなものでした。収容所が建てられた時やなんかは、この町でもインディペンデンスでも、「おいおい、こいつはひどいぜ！ 俺たちはここから出て行かにゃならん。あいつらは俺たちの喉首をかつ切るだろうし、他に何をするか分かったもんじゃない」と言っている人々がいた。そいでいて、時がたつにつれ彼ら、つまり地元の住民もそれらの人々が人間だって事、彼らはあそこに確かに収監されてはいるが、地域に何ら迷惑を及ぼしたりはしないって事が分かって来た。あれはなかなかの俄か景気でもあったとは言えますからね。つまりあれがここローンパインの地域の経済を盛大に押し上げたんですよ。

H：その点をもっと詳しくご説明願えますか？ どんな風にでしたか？

J：そうですね。彼らが最初にあそこで始めた時を思い出しますが、あのバラックからしてみんな建てなけりゃならんかった。あの頃は仕事が実に稀だったんだが、あそこでは釘を打てるような人間なら誰でも雇ったん

で、そいつはその日の内にわか大工になって、出かけて行って良い仕事をもらった訳です。覚えている限り時給1ドル35セントで、超過手当ても出たし、当時としては良い稼ぎでした。それで1日に10時間は働いていたと思います。それにこの仕事の事を聞きつけた人々が実際上カリフォルニア州全体からこの郡へ流れ込んで来ました。ものすごく大きな建設の仕事でしたよ。一時は恐らく、正確に知っている訳じゃなくて想像に過ぎませんが、150人の大工をあそこで使っていたようです。その者達の多くはもう長い事一週間まるまるの仕事などなかったもので、最初の給料小切手を受け取ってまずした事と言えば、ローンパインへ走って来て道具や何かを買うという事だったんです。

そう、勿論あの頃は物を手に入れるのが実に困難だった、ほとんど今日と同じ位にね。〔訳注…インタビューはオイルショック時に行われている〕私はピックアップトラックでロサンゼルスへ買い付けに行きビルに入って行って買える限りの道具を買い入れ、持ち帰ってそれをウィンドウに並べる。そうすると次の週末連中が給料をもらおうと、あつという間に私の店の道具は皆売れてしまったものです。これは、景気の立ち直っていった一つの例にすぎません。

それに無論の事、ホテルや食堂、バーなどは皆収容所で働く大工のお蔭で大繁盛していました。

それで、建物ができて最初の日本人を移し始めたんですが、日本人がそこへ行ってみると家はあった。だけど、持ってなくて町でなら手に入る物がうんと沢山あった。だからあそこの衛兵の指揮の下に彼ら、多分バス2台分の日本人を町へ運んで来て、彼らはウズラみたいに散らばって私らの町のメインストリートを往ったり来たりして、これを買ったり、あれを買ったりしたんです。

H：発足当初1942年の事ですか？

J：収容所を発足させた最初の時です。これが1ヶ月程続きました。それから、言った通りに、こういった事にはいつでも反対の人々がいるもんですから、そういう人々が言い始めたんです。「いやいや、俺たちはあの日本人共に俺たちの通りを往ったり来たりしてもらいたくないな。」ってね。そういう訳で、本当の所どういふ風にして良かったかは良く覚えていないんですが、あなたが先におっしゃった委員会を通じて良かったか、それとも何か別の方法で良かったか、彼らは、彼らってのはラルフ・メリットとかボブ・ブラウンとか収容所組織の上層部ですがね、「それじゃもうこれらの人々を無差別に町へは出さないようにします。一どきに彼らの40~50人をやって来させるなんて事はもうさせません。ただ週に2、3度、他の人々のために買い物をする役目の、そう6人か8人位の人々を連れて来ます。」という風に決めたんです。それはそれで結構だった。そういう風になった。

で、人々は私らの店へ来たものです。日本人青年が一人大きくて長いリストを持って店へ入って来てこれ、これ、これといったように買ってお金を払う。「それじゃこの品の代金に1ドル払います」、それから「この品の代金を払います」てな感じです。「これはスージーのため、こちらはサリーのため、それからこれは別の誰かのため。」それから彼は品物を抱えてあそこへ帰ったのです。

で、こういう事が多分4、5ヶ月も実に順調に続いたんですが、突然、こういうお遣い役のある者が、私から何かを1ドルで買って、収容所へ持って帰って隣近所に5ドルで売り、差額をポケットに入れるという事をしでかしました。だからうまく行かなくなった。それが日本人収容所からの買い物をついにしたんです。他の事や人間でもある事です。一個の腐ったリングが一樽全部をダメにしちゃう、そういう事が起こったんですよ。

しかし全体としてはですね…それにあなたが先におっしゃったように、あそこで雇われていた地元の住民がかなりいました。管理人、職人、また何でも屋の職員。それに勿論あそこには衛兵として軍の兵隊の一隊が置かれていて、彼らは自由に往き来できましたから町に多くの金を落としてくれました。

H：あなたは商業会議所やライオンズクラブなどの市民活動に関係していただけに、まさにこの町の脈動をお感じになれる立場にいらした訳ですね。収容所が存在し続けるにつれて、何か圧力が加えられるとか、恐怖が刻みつけられたとか、そういう事はありましたか？ それが話題になった、例えばライオンズクラブの会合で話題になった事はありませんでしたか？

J：いいえ、話題に持ち出された事はなかったと思います。収容所では彼ら自身の間で2、3の悶着があったんですが、それは町には影響しませんでした。そう、実際に圧力を感じたことはなかったと思いますよ…

H：そこなんですが、何か反応を引き起こしたであろうと思われる事の一つは1942年12月にあそこで起こったいわゆる暴動で、2人の被収容者が殺された事件です。その後で収容所が一層安全を期するようチェックしようと試みた事も分かっています。地域社会を通じてある種のパニック、このような暴動がある種の危険を

引き起こし得るといった感覚が生じたのではないかと思います。覚えておいでですか？

J：ええ、それはその通りだったと思います。しかし私自身と私の家族に関する限りその事をあまり重大には考えていませんでした。何ていったってそりゃあの人たちは実にしっかりと監視されてたからね。監視塔もあれば衛兵もいた。ツールレークの収容所の話なさいましたね。それでこのマンザナーで何か本当に重大なトラブルが起こると、そういう人々はツールレークへ移送されたんです。それにあそこは、その、何というかマンザナーよりもっと強制収容所といった感じでしたから。

マンザナーはですね…そう、もう少し立ち入ってみますと、私たちは当時ここで製氷所を持っておりまして、収容所と契約してあそこへ氷を供給していました。時には彼らの方が来て氷を持って行く事もあったし、私の方が出向く事もあったんです。だから私はあそこへかなり何度も氷を運び込んだ訳です。それで人々はですね、あそこでは大部分が家族で住んでいましたが、自分たちの居所はきちんとあつたりして、見たところ、悪い状況なりにできる限りの工夫をしていましたよ。しかし恐怖、そう地域を脅かしたかという点については、どうも私は感じなかったようですね。多分私は楽観的すぎるのかも知れませんが、誰かが侵入して来て町で騒動を起こすなんて事は心配しませんでした。何故って、そういう事は全く起こりませんでしたからね。

多分私らに起こった問題と言え、衛兵の何人か、軍の分遣隊の一部がたまたま町に来てバーの腰掛けをいくつかこわすとかそんな事でした。いや全くもう、私らの抱えた問題と言え、そんなもんでしたよ。それでそういうのは軍のMPがちゃんと始末をつけましたから、郡が市民を守るために警察力を倍増させにやらんとか何とか対策をたてるようなケースじゃなかった。

損な話ではなかったんですよ。勿論彼らの方は…あなたの方が恐らく私よりちゃんとした数字をお持ちでしょうが、ピーク時にはあそこに1万人がいたんだと思う。あれ以来、彼らが解放された後になってからも何年もの間、ここへ戻って来てマンザナーを貫流していた彼らの大変良く知っていたシェパードクリークやジョージズクリークへ来ては釣りをする人が何人もいますから。ここの表通りで店を出している私らのいく人かは、彼らと、それも場合によっては二世代分の人たちと知り合いになったが、彼らは何ら悪感情は持っていないようでした。分かりませんがね。多分私は運よくまともな人達とだけ話したのかも知れない。分かりませんな。

H：それなら収容所が存在していた時にマンザナーにいらしてもあまりあなたに敵意が向けられているようには感じなかった訳ですね？

J：全然感じませんでした。

H：オーウェンス・ヴァレー地域の住民のために収容所で催されたショーとか展覧会などを何か御存知ありませんか？ 彼らが時折り収容所の公開日を設け来客をもてなしたという事を耳にはさんでいるのですが。そういうものに招待された事はおありでしたか？

J：招待はされました。しかし家族の誰かが出掛けた事があるような記憶はありません。ほとんど日曜毎に、日曜親睦会は開いていたし、アイスクリーム祭だとか何とかもありましたね。それから話を聞いた地元の人も沢山そこへ出掛けて行ったようですが、いや、私自身は一度もそこへ出掛けた事はありません。

H：それでは、マンザナー収容所の設置はある意味で町にとって有り難いものだった…戦争の勃発が観光客の流入を妨げて地域経済の主要な収入源を干上らせてしまっていたという事を考えると、恩恵だったと言えるのでしょうか？

J：その通りです。

H：収容所によって生み出された経済活動は、ローンパインの町にとって全くの福の神だったわけではありませんか？

J：そうだったと感じますよ。

H：あなた自身、個人的にはどうでしたか？ 収容所のあった初めの数ヶ月の間は、経済が活況を呈したことで恩恵を被ったとおっしゃいましたが、それは収容所の存続期間を通じて続きましたか？

J：いいえそれ程ではありません。かなり先細りでした、というのも一旦落ち着いてしまうとですね…そう一つ例をあげましょう。初期には、彼らがあそこで暮らし始めた最初の2、3ヶ月には、私共で10から15ダースのたらいを売ったと言えましょう。それに多分同じだけの数の洗濯板やなんかもね。今日日は洗濯板やたらいなどどんなものか知らない人が多くなりましたが。それらが主なもので、他にまた小鍋とかフライパンとかやかんなども少し出ました。しかし一旦落ち着いて暮らしが軌道に乗ってしまつて、洗濯小屋も設け、

あれやこれやと設けていきますと…何せみんな大急ぎで設営されましたから…そうになってしまうと彼らはもうあまり町で買う必要がなくなったのです。

前に、私らが収容所がこのオーウェンス・ヴァレーに設けられる事について何か知ってたかとお尋ねでしたね？ それはもう最初の材木の荷が現場に到着し始めて、あのバラックを建て始めるまで知らなかったんですよ。仕事の始められた時から人々がそこに来るまでに、3、4ヶ月を超えることはなかったと思います。ですから当然ながら最初の集団がやって来た頃にはただ四面の裸の壁があっただけでした。それに自分の個人的所有物を持ち込んだ人も多かったけれど、何も持って来なかった人も多かった。そういう所に私らの出る幕があった訳です。しかし時が経つとですね、ええそれでも確かに少しは物を売りましたよ。それに彼らも特定の人々が町に来るのは許可し続けた。配達物を取りに来たり、郵便物や私らの売っていた氷なんかを受取りに来たりしにですね。そう運転手が品物の小さなリストを持っていて、車で廻ってあそこの人々のために買い物をしたりしていました。

H：私達は鉄道の駅で働いていた何人かと話したんですが、彼らによれば戦争中にそこで6人程の日系米人が働いていて、マンザナー向けの品物に限ってですが荷下ろしの手伝いをしていたそうです。他に誰か町の人で、どんな形でも良いですから収容所からの労働力を使っていたのを覚えていませんか？

J：いやいや。日本人労働力を使っていた地元民は誰もいなかったと思います。実際の所マンザナーの上層部も奨励していなかったと思います。あの人たちはあそこにおいて、そして勿論あそこには立派な商品用作物の菜園がありましたから、自分たちの所の世話をしていたし、そこでもってする事が沢山あった訳です。すごい野菜を育てていましたよ。枯れていた果樹を刈り込みまして、そこは楽園みたいになりました。本当ですよ。勿論住居は…彼らの住居はまことに貧弱なものでした。ただの長いバラックで、仕切り分けして沢山の住まいにしたんですね。中にはそれを実に立派に整えている人もいましたが。

H：町の人々が配給を受けているというのに、マンザナーの人々の手に入る物資に対する羨望はありませんでしたか？ つまり、ある種の物資…たとえば砂糖とか肉なんかですが…そういうものはローンパインやインディペンデンスの住民にはかなり厳しく制限されていたのに、うわさによれば収容所に抑留されていた日系米人の所には豊富にあるという事に対して何か嫉妬のようなものがあつたのでしょうか？

J：うーん、その事もですね、正直に申し上げて私らはかなりの年数メインストリートとマウントビューストリートの角に暮らしていたけれども、そういう事はほとんど私らの傍を通り過ぎていったのですよ。そういう事は人伝てにししか入って来ない。しかしその事についての、物資が欠乏しているがジャップには物を持たせているというような事についての噂や、それを流していた人々については記憶がありません。何故と言って実の所地域にはあそこの日本人がどのように暮らしていたか知っていた人があまり多かったとは思えませんから。あそこは堅固な収容所だったというのが実状でした。お望みなら強制収容所とでも何とでも呼んで下さい。とにかく人々はあそこへ自由に入出入りしたわけじゃなかった。地元民の方も収容所の人間の方もです。ですから、本当にそんな事はなかったと思う…ええ、それは全くなかった、彼らの持っていた物や私らに欠けていた物についての噂は全くなかったと言いたいね。

H：先程最初の日系米人の集団が到着した時の事を覚えているとおっしゃいましたね。明らかに約1,000名の者が先発隊としてここへ入って来まして、ローンパイン付近の何人かの方はこれをかなり鮮明に覚えておられます。最初のグループが連れて来られた時の事を覚えておられますか？

J：ええ。記憶によれば、グレイハウンドのバスで連れて来られて、そのまま町を素通りして行きました。その時には、無論この辺の誰も、間を置かずにあれ程沢山の人があそこへやって来るとは分かっていなかったと思います。それに今でも、この町や地域で沢山の人があそこへやってくるとは思えないかと思うんです。そう、当時郡、つまりインヨー郡全体で恐らくほぼ1万人の住民がいました。それで私らのすぐ裏庭のマンザナーの100エーカーかそこらの敷地に、インヨー郡全体に匹敵する人々が住まう事になった。これは中々でね……彼らには出入りがありましたし。つまり、どれ位の期間に亘ったか分からないが人々の搬入は一ぺんには少しづつでした。100人の時もあれば、1,000人の時もある、それに勿論転出もありました。彼らの内の何人かはツールレークへ行ったり、連れて行かれた者もある。しかし、そうですね……あそこにどれ位の人々がいたか、マンザナーの人口がどれ程かという事を知っていた者は、ほとんど地域の十人に一人でしかなかったんじゃないかとあたりをつけています。

H：つまり被収容者は収容所にこもり切りだったので、地域の大部分の住民には全く謎のようなところがあったという訳ですね？

- J : うーん。何と言うべきか…まあ、「自分達の小さな領域外の活動の恩恵は被っていない住宅開発」とも言いますかね。
- H : 収容所が実際にどのように運営されているかとか、どのような改善が見られたかという点について何か報告を受けた事がありますか？たとえば商業会議所やライオンズクラブの会で、所長のメリット氏が彼のスタッフが出てきて収容所についてしゃべるといふ事はありましたか？
- J : ええ、ありましたとも。ええそれはですね、1936年にインヨーアソシエーツというものを組織したんですが、これはヴァレー全域に亘る商業会議所とも言うべきもので、ラルフ・メリットはその設立に助力してくれたんです。それから彼がこちらへマンザナー戦時転住収容所プロジェクトの長として赴任しましてから彼は毎月その会合に出て収容所で起こっている事を報告していました。メリットは、数字や何が起こっているかという事の本質については大変注意を払っていて、オーウェンス・ヴァレー住民に収容所の進行状況について情報を与え続けました。彼は実質的に収容所の存続期間中ずっとあそこにいました。ポプ・ブラウンは、あれが始まった時にあそこにもういたと思います。
- H : ええ、ブラウンはマンザナーが開設された時の広報官でした。実の所彼はメリットより先にあそこにいたので、メリットはいわゆるマンザナー暴動直前の1942年11月になって赴任したのです。
- J : その通りなんでしょうね。
- H : そしてメリットの前にはナッシュという名の所長がいたのです。
- J : ナッシュ、そうです。彼の事は忘れていました。
- H : ロイ・ナッシュです。それから彼が赴任する前はあそこは軍の管轄下にあつて、トリッグス、クレイトン・トリッグスという人物があそこの所長をしていました。
- J : 彼は少佐か中尉でした。どっちだったか忘れたけど。
- H : その時は文官だったはずですが。ただ後になって軍に登録されたのです。
- J : ええ、その通りだと思います。それからラルフが入って来てからは、もう彼は事態をかなりゆっくりしたものにしたので、私はずっと良い関係を持つ事ができました。
- H : 「事態をゆっくりしたものにした」と言いますと？
- J : それはつまり、言い換えるとですね…暴動やなんかの事ですが。そうあれは私の知っている限り、一回きりの事件でした。それにあれはたまりにたまつた暴動ではなかつたんです。尤も、良く知ってる訳じゃないけど。何が原因だったのか、その背景にどんな考え方があつたかまるで知らんのです。ただ分かっているのは…ラルフ・メリットが、暴動の後間もなく所長として入って来ると、もう収容されている人々と当局の関係は対等になったように思えたと今では申し上げられる。
- H : ロイ・ナッシュにお会いになつた事は？
- J : はっきり言えません。多分会つたんでしょうが、その名前はぴんと来ません。会つたかどうかまるで考えた事がない。
- H : ひょっとしてメリットが指揮を取るようになってこの地域の住民に大いに信頼感が出てきたという事じゃないかと思つたんですが。彼はインヨー郡やオーウェンス・ヴァレーの人々をナッシュよりはもう少し親密に知つていた訳ですから。
- J : それは大いにあつたと思いますね。本当に。ラルフ・メリットは収容所が設立されるかなり何年も前からこの郡をあちこち動いていましたから、あなたの言われるように人々の信頼を得ていたし、恐らくそれがね、あの収容所での被収容者の行動について地元民が持つていたかも知れないどんな疑惑をも鎮めたんだらうと思いますよ。
- H : オーウェンス・ヴァレーにはラルフ・メリットがここの住民の中ではどちらかという議論の種となるような人物だと評する人がいました。どんな種類の議論がラルフ・メリットを取り巻いていたのでしょうか？
- J : (笑い) うーん、勿論ラルフ・メリットはもう故人になりました。しかし彼はですね…私はいつだって彼とはうまくやっていたんですが、フーヴァー政権の間は彼はサンホアキン・ヴァレーの干葡萄栽培者協会を牛耳つていたか、会長をしていました。多分御存知でしょう。
- H : サンメイドレーズンカンパニーですね？
- J : そうです。それで彼はそこでもって少々の厄介事に巻き込まれたんです。ここら辺の多くの人々はそれを知つてました。それにラルフは実にあけすけにものを言うたちでした。何せ誰のことも好きになってしまう人と誰をも好きになれない人がいるもんだから。彼がやって来ると、多分こう感じた人もいたんでしょう。「そ

ら、大都会育ちの奴が町へやって来て、俺たち田舎者にどうしろこうしろと言いやがる。」でもわたしはラルフとは金輪際問題なんかなかった。彼と私は大変良い友人でした。彼はパナミント・ヴァレーの鉱山に何年も利権を持っていたし、こちら辺の地域一体に他にもいくつか持っていました。

H：彼はビショップでタングステン鉱山を再開したのではないのですか？

J：うーん、彼がタングステン鉱山にそんなにかかわっていたかどうか分かりませんねえ。記憶にないですね。分からないっていうのは知らないからなんです。彼がここに持っていたので知っているのは鉛と銀の鉱山だけです。彼は他にも多くの鉱山に利権を持っていたよ。しかしあそこのタングステンと関係があったかどうかという点は本当に知らないんです。

H：私の理解する所では、30年代の半ばに彼はサンメドレーズンカンパニーが倒産した後でオーウェンス・ヴァレーへやって来たのです。彼はやって来てしばらくはガン一家と一緒に住んでいました。ガン一家とはどんな人々でしたか？

J：そう、ヘレン・ガンとその夫それに彼女の父親はこの地域の本当に本当に古い開拓者達でした。彼らはインディペンデンスに住んでいました。彼らが元々このミニエタ鉱山を所有していたんで、ラルフはヘレン・ガンと一緒にこの仕事に入ったんです。彼女の父親は死去していて、彼女の母親が、そうだったかな、そうです、彼女の母親がそれを持ってました。そう彼らはインディペンデンスにずーと前から住んで来た古い開拓者の一家なんです。

H：私がある所から聞いた話では、明らかにメリットはここに住んでいたが、彼の妻はオークランドに住んでいた、彼はポリオか何かを患っていて、彼の妻はオーウェンス・ヴァレーが好きでないか、何かガン一家に対して悪感情を持っていたという事なんです。どういう事なのか良くは知りません。良く知られた話だったんですか？

J：私をそういう事に巻き込まないで下さいよ。(笑い) 恐らく本当でしょう。私は知りませんがね。ラルフは当地にかなりいましたが、いつでもインディペンデンスのガンの家に滞在していました。

H：彼が収容所で働くようになった後、奥さんはここへ移って来ましたか？

J：いいえ、そうじゃないと思います。ここへ移ってきたかどうか本当に知りません。知らないんですよ。

J夫人：それはゴシップの類の話ですから、止めて下さいな。

H：この話は続けたくありませんか？

J：(笑い) そいつはもうすべて噂話に過ぎませんから。

H：日系米人の収容の話に戻りましょうか。個人的には収監の事をどう感じておられましたか？ 必要な事だったと思われますか？

J：うーん、それもまたあまりコメントしたくない事ですな。明らかにあれは政府がやるべき事だと考えて、そうした訳です。現在私らはガソリンの配給制に直面していますよね。これをどう思われますか？ つまり同じ状況なんです。是と考える人もいれば非と考える人もいた。当地に収容された人の多くは御存知のようにロサンゼルスに仕事を持っていたし、それは他の人も皆知っていた。それで彼らが当地にいるのとロサンゼルス地域にいるのとでどう違うのかというのはまるではっきりしない話です。それについて私はこうだとかあだとかいう思いは何らありません。

H：ただ政府はやはり日系人といっても、外国籍とアメリカ市民とを一緒くたにして収監するのではなしに、外国人と市民の間には区別をつけるべきだった、そうあなたもお考えになるかどうか知りたと思っています。政府はやはり市民権というものをもう少し尊重すべきだったとお考えになりますか？

J：うーん、それは大変難しいし、大変扱いにくい事になったでしょうね。たとえばあなたがアメリカ人、日系米人市民だったとして、あなたの兄弟が日本から渡って来たばかりだとすると、もし兄弟が拘束されてあなたが残されたらどんな気持ちになりますか。分かりませんね。一人を拘束するなら全員を拘束する事になるんじゃないかな。そういう風に思えたり、政府はそうした訳です。確かにあの人たちには多かれ少なかれ辛い事だったと思うがね、それでもここにいた実に多くの人は精一杯頑張っていたからね。というのはですね…この4月に昔の収容所跡に一枚の銘板が落成したんですよ。多分ご覧になったと思いますがね。私はこの事を手配した州下院議員さん達との何回かの会合に居合せたんです。その会合に、銘板を設置しようという計画を推進していたこの委員会に属していた日系人の二世、三世の人が来ていて、中には収容所に小さな子供の時に入っていた人なんかもいましたね。

H：マンザナー委員会の事ですね？

J : そうマンザナー委員会です。そしてあの人は何ら敵意を持ってはいませんでしたよ。一世についちゃ分からんけどね。何せ大部分は亡くなったから。ただあそこにかかなりの間収監されてた後で良くここへ来ていた一世が一人いて、ロサンゼルスで青物市場にいた人ですがね。そこに大きな面積を持っていた大変裕福な人ですが、あそこに収監されていたんです。しかし収容所から出て戻って自分の仕事を再建してからすぐに、彼は夏場、一週間、二週間、三週間とここで釣りをして過ごしましたよ。まさにあのマンザナーの小さな釣り場でね。彼はまるで敵意を持っていませんでした。

H : あそこには魚がいたんですか？

J : あの頃はいました。もうきれいに釣り取られてなくなってしまいましたけどね。(笑い) ええ、あの人たちはあそこで大いにやっていたからね。

H : ホプキンスさん、これまでのインタビューで私たちのカヴァーし切れなかった事で何か戦時中のマンザナーのエピソードについてお話しいただく事はありますか？

J : いえいえ、私たちは色々な事をとて良く話し合ったように思いますよ。

H : それでしたらカリフォルニア州立大学フラートン校、日系米人オーラルヒストリー・プロジェクトのために貴重なお時間を割いてご協力を頂き、本当に有り難うございました。

(8) ドナルド・H・ブランソンは、OHCによれば、1910年頃生まれ。1973年12月20日に、アーサー・A・ハンセンとデヴィッド・J・ベルタニョーリの二人にインタビューを受けている。午後1時からのインタビューで、場所はカリフォルニア州ローンパイン、ノースローンパインアヴェニュー196番地。35分のテープが残されている。Hは、ハンセン。Bはベルタニョーリ。Dが、インタビュー어의ドナルド・H・ブランソンをさす。

B : ブランソンさん、まず初めにあなたの個人的背景から少しお伺いしたいと思うのですが。オーウェンス・ヴァレーにはどれ位お住まいですか？

D : カリフォルニア州ハンチントンビーチで生まれました。私が初めてここへ来たのは1919年で、それ以来ずっとここに住んでるんですよ。時折りはこの地域の外で仕事に就いていました。最初は採掘をやって、それから後になって建設の仕事、主に鉛管をやったんです。

B : 第二次世界大戦の間は何をしていらしたんですか？

D : しばらくの間マンザナーで鉛管工として働きました。あそこで日本人青年の鉛管工グループを使っちゃったんです。

B : 収容所の配管をなさったのですか？

D : ええ、一部やりましたがね。大体は保守の仕事をやったんですわ。私がいる間に収容所内で建てられた建物の新規配管は私らがすべてやりましたがね。

B : あなたは請負業者だったのですか？

D : いえ、私はただあそこで政府のために働いたんです。

B : それでは政府に雇われていらしたのですね？

R : そうです。政府に雇われてました。私は軍属の鉛管工主任だったんですわ。

B : それはまさに開所当初の、収容所が運営され始めた頃の事ですか？

D : いえ、その時はシアトルにおりました。この収容所が開設された時にシアトルへ行って、それから軍に編入されるために呼び戻されたんです。しかし軍が私を取ろうとしなかったんで、ここへ戻って来てマンザナーへ働きに行くようになったんです。

B : それは何年の事ですか？

D : 1942年の事だったと思います。

B : 収容所で働いていた他の人々ですが、大部分はやはり地元の人だったのですか？

D : いえもうそこら中から来ていましたよ。もっとも地元の間も沢山あそこで働いていましたけどね。

B : 主力請負業者達は地元の人たちでしたか？

D : 収容所の建物のですか？ いや彼らは違いました。

B : それで労働者達はロサンゼルスから来たのですか？

D : 当時はかなりの人手不足でしたね、あそこでは仕事をしたい人間ならほとんど誰でも雇いました。地元民で仕事の欲しい者は誰でもあそこへ行ったんですわ。

- B : あなたはそれ以前にも鉛管工として働いた事がおありだったんですか？
- D : ええ、そりゃもう。私は州の請負鉛管工免許を持っているんですよ。
- B : 当時おいくつでしたか？
- D : 30才前後でした。
- B : さて、あなたはここローンパインに住んでいらした訳です。戦争が始まる前には、一般的に言って町の住民のマイノリティに対する態度はどのようなものでしたか？
- D : すべてのマイノリティが疑いなく受け入れられていましたよ。どんなマイノリティに対しても全く敵意などなかった。収容所について言う限りでは、地元民に何ら反対や何かはありませんでした。こういう事も起こったんだというような事の一つだったわけです。この辺には日本人はいなかったから、私らには彼らに対する意見が何もなかったしね。それに第一彼らは町の中にいた訳じゃなかった。
- B : ローンパインにはどこか他のアジア系アメリカ人はいましたか？
- D : いえ、この辺にはいませんでした。インディアンは多かったし、メキシコ人家族も少しいたけれど、当時東洋人はこの辺にはいなかったです。尤も、もっと前には、鉱山、とりわけセロ・ゴールド鉱山に働きに来ていた中国人が沢山いましたがね。19世紀末から20世紀初めにかけて300人の中国人労働者がキーラーのあたりに住んどりましたが、みんないなくなりました。
- B : いつ頃になると彼らはいなくなっていたのですか？
- D : 彼らが到頭みんななくなるのは...そう1920年代の末までここに住んでいたでしょう。
- B : 彼らは鉱山以外では何をして暮らしていたのですか？
- D : ああ、湖に面してバートレットソーダとNSPソーダの工場があったんですよ。彼らは労働者階級でした。
- B : あなたも、しばらく採掘をやっていたと言われましたね。何を採っていたんですか？
- D : いくつかの鉱山で働いたんですが、ホワイトマウンテンに滑石の鉱山を自分で持ってましたんで、そこでやっていた。
- B : それは枯渴したんですか？
- D : そうです。それに市場価格が下がりましたんで、鉱山はもう止めにして、ロサンゼルススのグレイディング=マックベーンという企業の鉱山部門に売り渡したんです。
- B : 分かりました。収容所がマンザナーに建てられるという何らかの予告を受けましたか？
- D : さあ、前にも言ったが、私はあれが開設された時ここにおらんかったからね。しかしあまり予告があったようには思えませんね。政府はいきなりやって来たんですよ。あれは市有地、ロサンゼルス市の所有地だったから、政府は市と取り決めをしたんでしょ。ローンパインの町民は、建設が始まるまで収容所についてはほとんど何も聞いてなかった。
- B : あなたはこの間独身でしたか、結婚してらっしゃいましたか？
- D : 独身でしたが、丁度その頃に結婚したんですよ。1942年の4月でした。
- B : それで1942年にここへいらして、それからすぐ収容所へ働きに出たんですか？
- D : そうです。
- B : 日系米人の鉛管工グループを任されていたとおっしゃいましたね。彼らはあなたをボスとしてどう扱いましたか？
- D : ああ、とてもちゃんとね。普通のグループのボスと同じようにですわ。実際働いてもらうという点に関しては普通のアメリカ人のグループと同じでしたよ。
- B : あなたの下で働いていたのは何人でしたか？
- D : ほぼ15人でした。
- B : 若者でしたか、年配でしたか？
- D : いやもうあらゆる年齢のがいましたね。
- B : 彼らは追い立ての前にも鉛管工だったのですか？
- D : そういうのもいましたね。年配の人たちです。3人程いました。残りは普通の青年で、鉛管に興味があって、働きたがってた連中です。賃金がどれ位だったかは忘れちゃった。彼らは、非常に安い額、月に15ドル位を受け取っていましたね。
- B : あなたは正規の賃金を支払われていたんでしょう？
- D : そりゃ勿論ですよ。

- B : 町の他の人々に関しては、経済的影響はどれ位のものだったですか。あなた自身はあそこで働いていらした訳ですが、町の人口の大きな部分がやはり収容所で働いていたのですか？
- D : そう、かなりの人があそこで働いていたから、実際この町を経済的に助けていましたよ。たとえば材木屋を助けたね。何千ドルにも当たる材木が売れた。それに町で物を売っているすべての商店が、町だけでなく、あそこでも売ったから。あそこへトラックを往復させて物を売ったんですわ。しばらくしてからは日本人自身がトラックやバスに乗ってほとんど毎日地元の店へ買いに来るようになりましたね。
- B : 日本人たちがローンパインへ買い物に来るのを許されていたと言われるんですか？
- D : そう、何人かはですね。大部分の人々はできませんでしたがね。仕事のスタッフたちは町へ来て買い物をしてましたよ。ずっと後になって、収容所も終わり頃になると、彼らはほとんど自由に町へ出るのを許されるようになりましたがね。
- B : 町の人々が収容所と行っていた取引が、被収容者に対する町民の意見を好意的なものにする方向に作用したと思いますか？
- D : いやいいえ。それはここの人々には大して影響がなかったと思います。彼らはあの事全体を当然の事と受け止めていたんですわ。何せ彼らは日系人と組んだことがあった訳じゃありませんから、彼らについて大した事も知らずに、ただ受け入れていたんです。
- B : 彼らに対する反感のようなものがあつたのではないですか？
- D : いいや、私の見る限りありませんでしたね。
- B : 彼らがひどい扱いを受けた例はありませんでしたか？
- D : 私の知ってる限り、なかったですね。
- B : ロサンゼルス地域...ベイスンにお住まいだった時に、東洋人との接触が何かありましたか？
- D : いいえ。
- B : ハンチントンビーチを出た時はおいくつでしたか？
- D : ああ、まだほんの子供でしたよ。家は先ずランズバーグへ行きました。そこに一年ただけで、それから1919年に両親がローンパインへ移ったんです。家はディアス湖のそばのディアスランチへ移りました。
- B : 従ってあなた自身は以前には全くアジア系マイノリティとの接触はなかったのですか？
- D : ええ。キーラーでは2、3人の中国人の子供と学校へ行きました。インディアンの子が幾人かと、メキシコ人の子も2人おりました。
- B : 彼らはどのように扱われていましたか？
- D : みんな大変ちゃんと扱われていましたよ。私や誰かが扱われるのと同じようにね。この辺にはいつでもインディアンがいたんですが、他の誰かを扱うのと同じように扱っているんです。一緒に仕事もするし、差別なんか全くありません。
- B : 彼らの就職する機会は実際に良いのですか？
- D : ええ勿論、彼らが就職する機会は白人のものと同じですよ。彼らは主にロサンゼルス市の公務員か、牧牛か、郡の道路局で働いてます。女性は、かなりの数がこの辺のレストランで給仕をしています。差別なんてまるでないですよ。
- B : そもそも日系米人は何故収監されたとお感じですか？ あなた自身のご意見は？
- D : うーん、それについては本当の所大して考えた事がないんですわ。ただ、新聞やラジオが、日本人は西海岸では信用がおけないって言ったりしましたがね。誰がスパイで誰が違うのか分からんっていう訳です。それには彼ら自身の安全のためもあったんだね。あっちの方ではみんなは彼らの事をかなり苦々しく思ってたから。アメリカの海岸線に侵入される可能性も噂されておったし。彼ら自身のためにも、政府が彼らをあそこらから立ち退かせたのは正しかったと私は思ったですね。
- マンザナー当局は、すぐに非忠誠者と忠誠者を分け始めた。非忠誠者と見なされた連中はツールレイク隔離収容所へ送られた。残りの忠誠な市民は多くの機会を与えられましたね。彼らに仕事を提供している沢山の掲示板を見ましたよ。何台ものトラックに乗った彼らがマンザナーを離れてアイダホへ行ってじゃが芋を掘ったりしたんです。アリゾナへ働きに行った者もいました。
- 政府は仕事を探したい者には短期出所の許可、無期限出所の許可さえ与えたんです。
- 日系人の医者や器具を十分に備えた立派な収容所の病院がありましたね。良い学校もありました。私の女房も望めばあそこへ英語を教えに行く事もできたんです。ローンパインの教師が実際に何人かあそこへ教え

に行きました。保育園までありましたよ。

法サービスも行き届いていたし、立派な図書館もありました。私も、私のために働いてくれていた仲間の者のためによく家から雑誌や新聞を持って行ってやりました。

消防局も警察も自治体も立派なものでした。野球から親睦会に至るあらゆる娯楽もあって、立派なレクリエーションホールで行われました。収容所の二年目によりやく完成したんですがね。私もあそこの幾つかの社交集会や夕食会に招待されて出席しましたよ。地元民もしばしば彼らの野球大会などに出かけてました。それからあそこで働いている者とその家族は、彼らの歯医者や医者に診てもらう権利があった。私もあそこで何度か歯医者に行きましたよ。

教育や職業訓練の機会も沢山ありました。日本人は若くても年取とっても、電気工や溶接工、鉛管工、機械工なんかになる勉強ができたんです。何度か私は車を彼らの自動車修理工場へ持って行って修理して貰いましたわ。

さもなきゃ農夫になっても良かった。土地を配分するのを受け持っていた男がいますね。彼らは土地をみごとに開花させたもんですわ。できた野菜を家に持って帰るようにと私にくれる人が始終おりました。今まで見た内で最も大きな大根を育て取りましたわ！

農業用には政府がトラクターや何かを与えました。乾燥野菜プラントと缶詰工場もありましたな。鶏はそこらを走り回ったし、豚や牛もおりました。

ジョージ・タケムラさん、この人と私は知り合いになりましたが、彼は砂漠から小枝や木を拾って来ては美しい家具をこしらえておりました。

そう、私らの政府は彼らに良くしてやったし、周りの小さな町の住民らもそうだった。

B：もし日本人を収監していなかったとして、仮に合衆国への攻撃があった場合彼らが現実に入侵した日本兵を助けたとお考えですか？

D：いやそれは分かりませんな。疑わしい気もするがねえ。あったかも知れませんが、確かに。

B：しかし全体としては、そうでないと……

D：そうでないと思います。

B：それで収容所は本当に必要だったと思いますか？

D：いや、本当は必要なかったでしょうな。あれは政府の脅えだったんだと思いますよ。本当には必要なかったと思います。

B：日系米人連隊の事や、戦争中を通じての彼らのヨーロッパでの大活躍の事をお聞きになった事がありますか？

D：ここの収容所からもかなりの青年が行きましたよ。イタリアへ戦いに行った者もいましたね。マンザナーのいくつかの家庭で、私は軍に入った子供らの写真を見たんですわ。家族たちに聞けば話してくれるでしょう。沢山の息子達がイタリアで戦死したんですよ。

B：彼らは大変有名な部隊だったのですよ。最も多く勲章を受けた部隊だったと思います。

D：マンザナーからの皆志願兵でしたから。

B：さて、その事は町の人々の態度に少しでも影響したでしょうか？ 彼らは日本人に対しより好意的になったように見えましたか？

D：前にも言ったけど、元々からここには彼らに対する偏見などあまりなかったと思うんでね。

B：それで、軍に参加していた多くの日系米人が、ユニフォームを着てマンザナーへ家族の面会に来るといような事があった訳です。彼らが町を通る際、彼らは他のアメリカ兵士たちと同じように、大いなる敬意を以て迎えられたでしょうか？

D：ああ、そうだったはずだね。

B：収容所がここに存在したという観点からして、現在町の人々は日系米人をどのように見ているとお考えですか？ 住民は収容所と共にあったという体験を持って暮らしている訳ですけど、それが彼らの現在の考え方にもどのように影響していると思われませんか？

D：分かりません。ここらではもう収容所の話はあまりしないから。

B：それでは今日の傑出した日系米人たち、ダニエル・イノウエ上院議員やS. I. ハヤカワのような人々に対する意見はどうでしょう。

D：本当に知らんのですよ。私は、立派な人達だと思いますがね。

B：町の住民がこれらの人々の名を目にする時には、収容所の事を考えるとお思いですか？

- D: うん、多分考える人もいるでしょうね。ここの住民も今じゃあ大方若い人達なんで、彼らはあそこの側を通ったりしても「あれがジャップの収容所だったんだ。」と言うだけなんですわ。もう何も残っておりません。建物が一つだけです。つまり昔のレクリエーションホールだった奴です。郡道路局があれを接收して使っています。
- B: 当局はドイツ人やイタリア人も日本人同様に収監すべきだったとお考えですか？
- D: いや、そうは思いませんね。この国ではやる事じゃない。
- B: どうしてでしょう？
- D: それは、あの人らを収監するのはフェアじゃないと思うからね。彼らが放っておけないと証明されない限り、私なら収監はせんな。
- B: それで、その話には日本人も含めていらっしゃる訳ですか？
- D: 日本人も含めてですわ。ただあの頃彼らは「リトルトーキョー」に民族主義的な集団として集中して住んだからね。ドイツ人やイタリア人の方はそれ程の事もなかったでしょう。
- B: マンザナーに、収容所跡を国の記念物として遺すために銘板が設置されたのにお気付きですか？。
- D: ええ、それは新聞で読みました。
- B: 銘板の表現を御存知でしょうか？
- D: いいえ。
- B: それについてコメントをして頂きたいんですが。
- D: あの人らを住んでる所からあそこへ引っ張り出して仕事も奪ってしまったっていうのは本当に悲しい状況だったと思いますよ。
- B: 銘板に記されている言葉についてコメントして頂きたいのです。ここにコピーがありますので、読みます。
「第二次大戦の初期に、日系の祖先を持つ十一万の人々が、1942年2月19日発令の行政命令九〇六六によって転住収容所に収監された。
十ヶ所に及ぶそうした強制収容所の最初のものであったマンザナーは、有刺鉄線と監視塔によって囲われ、過半数アメリカ市民からなる一万の人々を収監していた。
ヒステリア、人種差別及び経済的搾取の結果として当地において被られた不正と屈辱が二度と再び現れる事のなき事を。」
- 何かコメントして頂けませんか？
- D: うーん、ここで彼らはとても良い扱いを受けたんですよ。ただいけなかったのは、彼らが自分たちの仕事や車を失った事、彼らの多くが破産させられたって事だね。
- B: 彼らが収容所に入れられたという事に経済的動機も一役買っていたとお考えになりますか？
- D: いや、とんでもない。そうは思わんね。彼らがあそこへ入れられたのは日本が我が国を真珠湾で襲った卑劣なやり方のためだよ。それにロサンゼルスの人々は海岸地方への攻撃を恐れていましたからね。兎に角起こってしまった事です。それに関しては、本当に悲しい誤りだったと思いますよ。でも私は間違ってもマンザナーを強制収容所の名で呼ばんがね。彼らは強制収容所でのような監視をされていた訳じゃない。バラックなんかの住む所とか、食べ物だって沢山与えられていたんですから。収容所の中でならどこでも好きな所を歩く事だってできた。中にはいなくちゃならなかったですよ。いやそういう建前でしたね。実際はみんなが中にいっぱなしって訳じゃなかったからね。沢山の者が山脈に向かって上っていったりなんかしてましたからね。クリークへ釣りに出かけたりなんかしたんですよ。
- B: そういったことは、しょっちゅう？
- D: そうとも、しょっちゅうでしたよ。何台ものトラックに乗って岩場の方やなんかへ出かけて行ったし、釣り竿を持ってとりましたよ。誰でも知っている事だった。彼らはいつだって溪流で釣りをしていたんです。しょっちゅうジョージズクリークで何人かに出会いましたよ。収容所の西にあるクリークですわ。彼らは悪い取り扱いなんぞまるっきり受けちゃおらんかった。
- B: アーサー・A・ハンセンをご紹介します。彼もいくつか質問があるそうです、ブランソンさん。
- H: ほんの二つばかりです。あなたは1942年12月のいわゆるマンザナー暴動の時にマンザナーで働いていらっしやいましたか？
- D: ええ。
- H: それを取り巻く状況について、それがどのようにあなたに影響したかなど少しコメントして頂けますか？

労働力不足があったのは知っているんですが……

D : 暴動の起こった朝は監視兵が私らを収容所に入れてくれませんでした。私らは門の所まで行ったんですが、そこから廻れ右をして町へ帰ったんです。私らの聞いた所では…いや私の聞いた所ではだが…主に若い人からなる大集団がいたそうです。兵士たちが暴動を止めるために入って来なけりゃならなかった。わきに兵士の宿舎があって、そこから呼び出されたんですわ。そうなった理由というのは、若者の一人の指導者だった者が捕まって拘置所に入れられたからだったんですね。拘置所は丁度門の側にああって、あの若者の大集団はそこに集まってた訳なんです。彼らはその若者を牢から出したかったんだな。

一人他の連中より荒っばいのが一台の車に乗り込みました。連中はキャンプの中の車に近づけたんでね。車を乗り回せた。政府の車をね。政府の車です。このリーダーは車に乗って、それを拘置所に突っ込ませようとした。つまり彼の目的は拘置所に穴を開けて、そこに収容されていた件の男を引き出そうという事だったんです。彼らは彼を出したがってたんです。このリーダーが車をスタートさせた時、兵士の一人が自動小銃を持って扉を開けて出て来て、その若者を狙ったのか、車を狙ったのか、撃ったんだ。それで、無論群衆が周り中にいた訳だから、ずばり群衆の真ん中に発砲した事になる。良く分からないけど、15人から20人が弾に当たったと思います。勿論これで事態は一気に鎮められました。所長のメリット氏はラスヴェガス地域から、海外派遣に向けて待機していた兵士達をいくらか呼び寄せ、彼らが収容所をパトロールしたけど、二週間程は無人の収容所のようにしたね。何せ日本人は誰も顔を見せさえしなかったんだから。誰も仕事に顔を出しもしなければ、建物の外にも出て来ないって風でね。

H : なるほど。この暴動が新聞で大きく報じられたのは分かっています。こういう軽度とは言え暴動の事を耳にした時には町の住民から何か反応があったはずだと思えるんですが。当時、警備を嚴重にしてくれとかいうような請願が出されたかどうか覚えていらっしゃいますか？

D : ないなあ。私らの中にもそれについて、何が起こったんだろうと話したりする者はあったがね。

H : ローンパインの町自体には本物の恐怖はなかったんですか？

D : ないね、全くなかったですよ。

H : インディペンデンスでは…これは勿論マンザナーをはさんで反対側の方の話になる訳ですが…何人かの人々と話をしてみたのですが、明らかに市民の自警団委員会があったようで、その目的は日本人収容所からの脱走者の侵入があった場合にインディペンデンスの婦女子を守るという事でした。あなたがこのインディペンデンスの噂を何か聞いておられないかと思ひましてね。あちらでは明らかにもう少し恐怖があったようですよ。

D : いや、その事については何も聞いた事はありません。でも私はあそこの収容所でいつもあの人々の中で働いていたけど、何も恐くなんかなかった。この町の人々の大部分はそれについて何も考えていなかった。あそこで少々暴動のあった事は知ったが、みんな気にせんかった。何かが起こるには兵士の数が多すぎましたからね。それに、あれは、ほんの少数の若造の反乱に過ぎなかつたですよ。収容所全体の事件じゃない。

H : 収容所でのお仕事をお止めになった原因は何ですか？ 建物が完成したからというような事ですか？

D : こっちの町の方でもっと良い仕事が提供されたもんで、それで止めたんですよ。それにその頃までには戦争もほぼ終わってましたし。

H : 私の質問はこれだけです。デイヴィッド、君の方は？

B : 一つだけあります。暴動の翌日、収容所に入るのを許されなかつたとおっしゃいましたね。

D : いや、翌日は入って終日仕事をしましたよ、ただ当日の朝がだめだったんです。あれはみんな入口の門の所で起きてね。それで兵士たちが私らに、家へ帰った方が良いつて言ったもんで。少しトラブルが起きたんだって言うてましたかね。私らにも若者らの集まっているのは見えたんですよ。

B : 緊張だの何だのがすべて鎮静化して収容所が本当に普段通り運営されるまでにはどれ位かかりましたか？

D : ああ、そりゃ一月かそこらですね。先に言ったように私らはもう翌日から仕事にかかったけれど、状況が鎮静するまでには一月位はかかったな。本当の所収容所は二度と元通りにはならなかつたですよ。あれ以降日本人は脅えているようだった。

B : あなたの監督下にいた労働者たちは何か暴動の事を言っていましたか？

D : あまり言わなかつたですね。私らがあれを見たかどうか聞いて取りましたよ。

B : 正確にはどのように言っていたか覚えていらっしゃいますか？

D : さあ、彼らはあの事をコメントしとつたが、何と言つたかは覚えてませんね。彼らの大部分はあれには

全くかかわってなかったから。あれが起きた時彼らは家におったんですよ。

B: どうも有り難うございました、ブランソンさん。カリフォルニア州立大学フラートン校、日系米人オーラルヒストリー・プロジェクトは、お時間を割いて協力していただいた事に感謝いたします。

Ⅲ. 総括

本稿では、ローンパインに住むほぼ同年代の二人のインタビューを迎えている。合衆国では、町の境界線にPop.○○○○という表示が出ていることが多いが、ホプキンスによれば、ローンパインの人口は、1933年には1,020人。それが、40年間でほぼ倍になったという。いずれにせよ、カリフォルニアの小さな町である。オーウェンス・ヴァレー全体の経済の梃子入れのための試みとして始まった「インヨーアソシエーツ」や「インヨー＝モノ協会」は、一連のインタビューにおいて屢々言及されるが、ロバート・ブラウンとラルフ・メリットという後にマンザナー収容所の上層部に入る二人が、この協会及びその発展したもの（各地の商業会議所等）に早くから関わっていたことについても、ホプキンスは語っている。（『ジャップの収容所』紹介－第Ⅱ部』では、A. A. プライアリーがメリットについて忌憚のない意見を述べているが、ホプキンスはその点ではソフィステケートされていると言えよう。）

ホプキンス、プライアリーの二人が共通して語っていることは、収容所建設前に政府から大規模な公告はなかったこと、町が俄か景気にわたったことであろう。ホプキンスは、住民の間に収容所建設に対して自ずと賛成、反対両派が生じたと述べているが、ブランソンによれば反対らしい反対もなかったとなる。収容所に対する不安感、衛兵の数の多さと、「ツールレーク収容所」の存在で和らげられたというホプキンスの指摘は興味深い。「ツールレーク収容所」は、10の収容所の中でもいわゆる合衆国への不忠誠組を集めた収容所であった。

肝腎の収監の必要性についてであるが、ホプキンスは、とりわけマンザナー収容所の被収容者の3分の2を占める米国民権を持つ者の収監について、市民権を持つ持たぬに関わらず日系人というカテゴリーを立てる方が、被収容者にとっても自然だったのではないかと応じている。また、ブランソンは、敵性国民の中でもドイツ系やイタリア系は収監の必要がなかったと思うが、日系人の場合は「『リトルトーキョー』に民族主義的な集団として集中して住んでいた」から必要だったと口にしてしている。

付記

日系人の強制収容を、真珠湾後の合衆国社会から日系人へ向けられた憎悪や迫害から護るためであったとする「合理化」（本稿でブランソンも「それに一つには彼ら自身の安全のためもあったんだね」と述べている）は、現在も一般のアメリカ市民の間に屢々見受けられる。これは、日系人の側からも発せられるが、以下にその好個の例を紹介する。但し、日系人の側からの発言が、上の「合理化」を直ちに正当化するものとは勿論ならないであろうが。

... 早く、キャンプに、行きたかった。

イノチが、あぶない。マゴマゴしてはおれん。

石を、なげられて、窓のガラスが、みんな、われた。

このヤローと、おも一たが、どーにもならん。

汗ミズたらした、畑のことを、かんがえると、涙がでた...

... 1942年5月15日、よーやく、カリホーニヤの、日系人は、汽車に、乗って、行った。

私らは、オーシャンサイド駅から乗った。行先は、ワカラナイ。

汽車には、黒いカーテンが、つけて、あるから、外は、見えない...

（新藤兼人の実姉は、開戦時カリフォルニア州エンシニタス（Encinitas）在住であった。戦後に新藤に姉から寄せられた手紙から引用。新藤兼人『祭りの声ーあるアメリカ移民の足跡ー』岩波書店、昭和52年、所収）